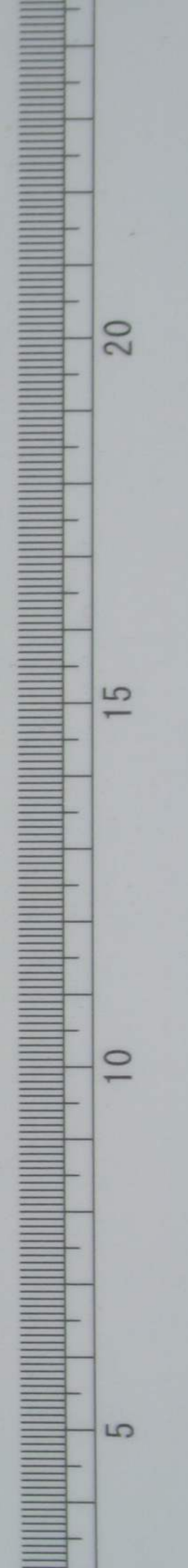




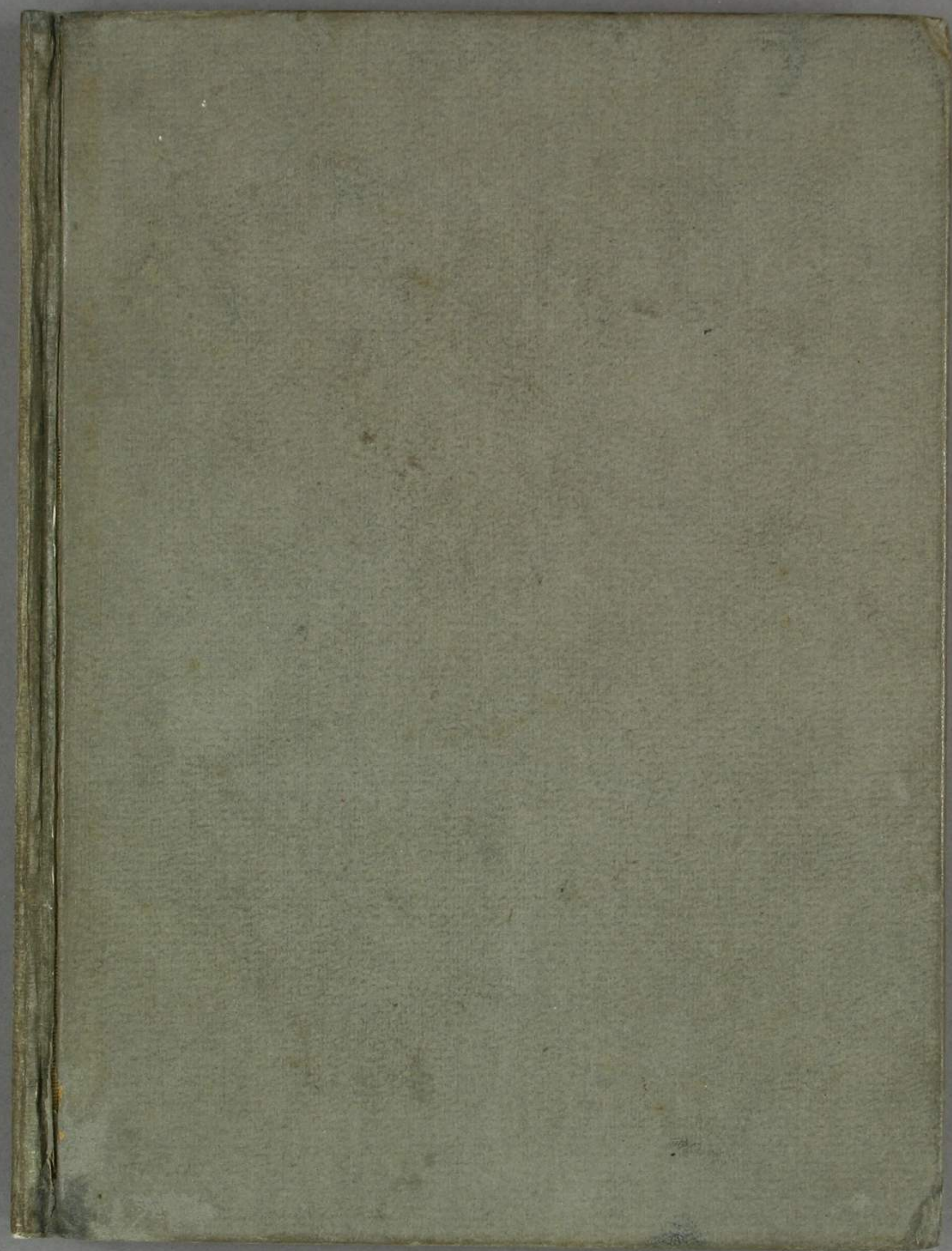
石の橋

石川町木箸



一握の砂

石川啄木著



September

一 握 の 砂

石 川 啄 木 著

*

東 雲 堂 版

世の中には途法も無いじん仁もあるものぢや、歌集の序を書けとある、人もあらうに此の俺に新派の歌集の序を書けとぢや。ああでも無い、かうても無い、どひれつた末が此んなことに立至るのぢやらう。此の途法も無い處が即ち新の新たる極意かも知れん。定めしひれくれた歌を詠んであるぢやらうと思ひながら手當り次第に繰り展げた處が、

高きより飛び下りるとき心もて

この一生を

終るすべなきか

此ア面白い、ふん此の刹那の心を常住に持することが出来たら、至極ぢや。面白い處に氣が着いたものぢや、面白く言ひまはしたものでぢや。

非凡なる人のごとくにふるまへる
後のさびしさは
何にかたぐへむ

いや斯ういふ事は俺等の半生にしこたま有つた。此のさびしさを一生覺えずに過す人が所謂當節の成功家ぢや。

何處やらに澤山の人が争ひて
鬪引くごさし
われも引きたし

何にしる大混雜のおしあひへしあひで鬪引の場に入るだけでも一難儀ぢやのにやつとの思ひに引いたところて大概は空闘からくじぢや。

何がなしにさびしくなれば
出であるく男となりて
三月にもなれり

とある日に
酒をのみたくてならぬごとく
今日われ切に金を欲りせり

怒る時
かならずひとつ鉢を割り
九百九十九割りて死なまし

随拱みて

このころ思ふ

大いなる敵目の前に躍り出でよと

目の前の菓子皿などを

かりかりと噛みてみたくなりぬ

もどかしきかな

鏡とり

能ふかぎりのさまざまの顔をしてみぬ

泣き飽きし時

こころよく

我にはたらく仕事あれ

それを仕送けて死なむと思ふ

よごれたる足袋穿く時の
氣味わるき思ひに似たる
思出もあり

さうぢや、そんなことがある、斯ういふ様な想ひは、俺にもある。二
三十年もかけはなれた此の著者と此の讀者との間にすら共通の
感ぢやから、定めし總ての人にもあるのぢやらう。然る處俺等聞
及んだ昔から今までの歌に、斯んな事をすなほに、ずばりと、大膽に
率直に詠んだ歌といふものは一向に之れ無い。一寸開けて見て
これぢや、もつと面白い歌が此の集中に満ちて居るに違ひない。
そもそも歌は人の心を種として言葉の手品を使ふものさのみ合
點して居た拙者は、斯ういふ種も仕掛も無い誰にも承知の出来る
歌も亦當節新發明に爲つて居たかと、くれぐれも感心仕る。新派

といふものを途法もないものと感ちがひ致居りたる段、全く拙者のひれくれより起りたることと懺悔に及び候也。

犬の年の大水後

藪野 棕十

此の集を兩君に捧ぐ。予はすでに予のすべてを兩君の前に示しつくしたるもの如し。従つて兩君はここに歌はれたる歌の一

函館なる郁雨宮崎大四郎君

同國の友文學士花明金田一京助君

この集を兩君に捧ぐ。予はすでに予のすべてを兩君の前に示しつくしたるもの如し。従つて兩君はここに歌はれたる歌の一につきて最も多く知るの人なるを信ずればなり。また一本をとりて亡兒眞一に手向く。この集の稿本を書肆の手に渡したるは汝の生れたる朝なりき。この集の稿料は汝の薬餌となりたり。而してこの集の見本刷を予の閑したるは汝の火葬の夜なりき。

著者

明治四十一年夏以後の作一千餘首中より
 五百五十一首を抜きてこの集に收む。集
 中五章、感興の來由するところ相違きをた
 づれて假にわかつてるのみ。「秋風のこころ
 よさ」は明治四十一年秋の紀念なり。

目	次
我を愛する歌	一
煙	七
秋風のこころよさに	一三
忘れがたき人人	一六
手套を脱ぐ時	二三

我を愛する歌

目	次
序	一
第一章	二
第二章	三
第三章	四
第四章	五
第五章	六
第六章	七
第七章	八
第八章	九
第九章	十
第十章	十一
第十一章	十二
第十二章	十三
第十三章	十四
第十四章	十五
第十五章	十六
第十六章	十七
第十七章	十八
第十八章	十九
第十九章	二十
第二十章	二十一
第二十一章	二十二
第二十二章	二十三
第二十三章	二十四
第二十四章	二十五
第二十五章	二十六
第二十六章	二十七
第二十七章	二十八
第二十八章	二十九
第二十九章	三十
第三十章	三十一
第三十一章	三十二
第三十二章	三十三
第三十三章	三十四
第三十四章	三十五
第三十五章	三十六
第三十六章	三十七
第三十七章	三十八
第三十八章	三十九
第三十九章	四十
第四十章	四十一
第四十一章	四十二
第四十二章	四十三
第四十三章	四十四
第四十四章	四十五
第四十五章	四十六
第四十六章	四十七
第四十七章	四十八
第四十八章	四十九
第四十九章	五十
第五十章	五十一
第五十一章	五十二
第五十二章	五十三
第五十三章	五十四
第五十四章	五十五
第五十五章	五十六
第五十六章	五十七
第五十七章	五十八
第五十八章	五十九
第五十九章	六十
第六十章	六十一
第六十一章	六十二
第六十二章	六十三
第六十三章	六十四
第六十四章	六十五
第六十五章	六十六
第六十六章	六十七
第六十七章	六十八
第六十八章	六十九
第六十九章	七十
第七十章	七十一
第七十一章	七十二
第七十二章	七十三
第七十三章	七十四
第七十四章	七十五
第七十五章	七十六
第七十六章	七十七
第七十七章	七十八
第七十八章	七十九
第七十九章	八十
第八十章	八十一
第八十一章	八十二
第八十二章	八十三
第八十三章	八十四
第八十四章	八十五
第八十五章	八十六
第八十六章	八十七
第八十七章	八十八
第八十八章	八十九
第八十九章	九十
第九十章	九十一
第九十一章	九十二
第九十二章	九十三
第九十三章	九十四
第九十四章	九十五
第九十五章	九十六
第九十六章	九十七
第九十七章	九十八
第九十八章	九十九
第九十九章	一百
第一百章	一百零一

海を渡る舟

東海の小島の磯の白砂に
われ泣きぬれて
蟹とたはむる

頬につたふ
なみだのごはず
一握の砂を示しし人を忘れず

大海にむかひて一人
七八日
泣きなむとすと家を出てにき

いたく錆びしピストル出てぬ
砂山の
砂を指もて掘りてありしに

ひと夜さに嵐來りて築きたる
この砂山は
何の墓をも

砂山の砂に腹這ひ
初恋の
いたみを遠くおもひ出づる日

砂山の裾によこたはる流木に
あたり見まはし
物言ひてみる

◎いのちなき砂のかなしさよ
さらさらと
握れば指のあひだより落つ

しつとりと
なみだを吸へる砂の玉
なみだは重きものにしあるかな

大といふ字を百あまり
砂に書き
死ぬことをやめて歸り來れり

目さまして猶起き出でぬ兒の癖は
かなしき癖ぞ
母よ咎むな

ひと塊の土に涎し
泣く母の肖顔つくりぬ
かなしくもあるか

燈影なき室に我あり
父と母
壁のなかより杖つきて出づ

たはむれに母を背負ひて
そのあまり軽さに泣きて
三步あゆまず

飄然と家を出でては
飄然と歸りし癖よ
友はわらへど

ふるさとの父の咳する度に斯く
咳の出づるや
病めばはかなし

わが泣くを少女等きかば
病犬の
月に吠ゆるに似たりといふらむ

何處やらむかすかに蟲のなくごとき
こころ細さを
今日もあぼゆる

いと暗き
穴に心を吸はれゆくごとく思ひて
つかれて眠る

こころよく
我にはたらく仕事あれ
それを仕遂げて死なむと思ふ

こみ合へる電車の隅に
ちぢこまる
ゆふべゆふべの我のいとしさ

① 浅草の夜のにぎはひに
まぎれ入り
まぎれ出て来しさびしき心

愛犬の耳斬りてみぬ
あはれこれも
物に倦みたる心にかあらむ

鏡とり
能ふかぎりのさまさまの顔をしてみぬ
泣き飽きし時

なみだなみだ
不思議なるかな
それをもて洗へば心戯けたくなれり

呆れたる母の言葉に
気がつけば
茶碗を箸もて敲きてありき

草に臥て
おもふことなし
わが額に糞して鳥は空に遊べり

わが髭の
下向く癖がいきどほろし
このごろ憎き男に似たれば

森の奥より銃聲聞ゆ
あはれあはれ
自ら死ぬる音のよろしさ

大木の幹に耳あて
小半日をばひしりてありき
堅き皮をばひしりてありき

「さばかりの事に死ぬるや」
「さばかりの事に生くるや」
止せ止せ問答

まれにある
この平なる心には
時計の鳴るもおもしろく聴く

ふと深き怖れを覚え
おつとして
やがて静かに臍をまさぐる

高山のいただきに登り
なにがなしに帽子をふりて
下り来しかな

何處やらに澤山の人があらしめて
闇引くごとし
われも引きたし

怒る時
かならずひとつ鉢を割り
九百九十九割りて死なまし

いつも逢ふ電車の中の小男の
稜ある眼
このごろ氣になる

鏡屋の前に来て
ふと驚きぬ
見すばらしげに歩むものかも

何となく汽車に乗りたく思ひしのみ
汽車を下りしに
ゆくところなし

空家に入り
煙草のみたることありき
あはれただ一人居たきばかりに

何がなしに
さびしくなれば出てあるく男となりて
三月にもなれり

やはらかに積れる雪に
熱てる頬を埋むるとき
戀してみたし

かなしきは
飽くなき利己の一念を
持てあましたる男にありけり

手も足も
室いつばいに投げ出して
やがて静かに起きかへるかな

百年の長き眠りの覺めしごと
呻してまし
思ふことなしに

腕拱みて
このごろ思ふ
大いなる敵目の前に躍り出てよと

手が白く
且つ大なりき
非凡なる人といほるる男に會ひしに

こころよく
人を讚めてみたくなりけり
利己の心に倦めるさびしさ

雨降れば
わが家の人も誰も沈める顔す
雨霽れよかし

高きより飛びおりるとき心もて
この一生を
終るすべなきか

この日頃
ひそかに胸にやどりたる悔あり
われを笑はしめざり

へつらひを聞けば
腹立つわがこころ
あまりに我を知るがかなしき

知らぬ家たき起して
遁げ来るがおもしろかりし
昔の戀しさ

非凡なる人のごとくにふるまへる
後のさびしさは
何にかたぐへむ

大いなる彼の身體が
憎かりき
その前にゆきて物を言ふ時

實務には役に立たざるうた人と
我を見る人に
金を借りにけり

遠くより笛の音きこゆ
うなだれてある故やらむ
なみだ流るる

それもよしこれもよしとてある人の
その氣がるさを
欲しくなりたり

死ぬことを
持薬をのむがごとくにも我はおもへり
心いためば
人

路傍に犬ながながと吠呻しぬ
われも真似しぬ
うらやましさに

真剣になりて竹もて犬を撃つ
小兒の顔を
はしと思へり

ダイナモの
重き陰りのこちよさよ
あはれこのごとく物を言はまし

剽輕の性なりし友の死顔の
青き疲れが
いまも目にあり

氣の變る人に仕へて
つくづくと
わが世がいやになり
にけるかな

龍のごとくむなしき空に躍り出でて
消えゆく煙
見れば飽かなく

こころよき疲れなるかな
息もつかず
仕事をしたる後のこの疲れ

空寝入生味呷など
なぜするや
思ふごと人にさとらせぬため

箸止めてみづと思ひぬ
やうやくに
世のならはしに慣れにけるかむ

朝はやく
婚期を過ぎし妹の
戀文めける文を讀めりけり

しつとりと
水を吸ひたる海綿の
重さに似たる心地おぼゆる

死ね死ねと己を怒り
もだしたる
心の底の暗さむなしさ

けものめく顔あり口をあけたてす
とのみ見てゐぬ
人の語るを

親と子と
はなればなれの心もて静かに對ふ
氣まづきや何ぞ

かの船の
かの航海の船客の一人にてありき
死にがねたるは

目の前の菓子皿などを
かりかりと噛みてみたくなりぬ
もどかしきかな

よく笑ふ若き男の
死にたらば
すこしはこの世のさびしくもなれ

何がなしに
息されるまで駆け出してみたくなりたり
草原などを

あたらしき背廣など着て
旅をせむ
しかく今年も思ひ過ぎたる

ことさらに燈火を消して
まぢまぢと思ひてゐるしは
わけもなきこと

淺草の凌雲閣のいただきに
腕組みし日の
長き日記かな

尋常のおどけならむや
ナイフ持ち死ぬまねをする
その顔その顔

こそこその話がやがて高くなり
ピストル鳴りて
人生終る

時ありて
子供こどものやうにたはむれす
戀こひある人のなさぬ業わざかな

とかくして家いへを出いづれば
日光にっこうのあたたかさあり
息いきふかく吸すふ

つかれたる牛うしのよだれは
たらたらと
千萬年せんまんねんも盡つきさるごとし

路傍みちばたの切石きりいしの上うへに
腕うで拱こみて
空そらを見み上あぐる男おとこありたり

何やらむ
穩かならぬ目付して
鶴嘴を打つ群を見てゐる

心より今日は逃げ去れり
病ある獸のごとき
不平逃げ去れり

おほどかの心來れり
あるくにも
腹に力のたまるがごとし

ただひとり泣かまほしさに
來て寝たる
宿屋の夜具のころよさかな

泣かまほしさに

友よさは
乞食の卑しさを厭ふなかれ
餓ゑたる時は我も爾りき

新しきインクのにほひ
栓抜けば
餓ゑたる腹に沁むがかなしも

かなしきは
喉のかわきをこらへつつ
夜寒の夜具にちぢこまる時

一度でも我に頭を下げさせし
人みな死ねと
いのりてしこと

我わがに似にし友ともの二ふた人りよ
一ひと人りは死しに
一ひと人りは牢ろうを出いでて今いま病やむ

あまありある才さいを抱いだきて
妻つまのため
あもひわづらふ友ともをかなしむ

打う明めけて語かたりて
何なにか損そんをせしごとく思おもひて
友ともとわかれぬ

どどんよりと
くもれる空そらを見みてゐしに
人ひとを殺ころしたくなりにけるかな

人並の才に過ぎざる
わが友の
深き不平もあはれなるかな

誰が見てもとりどころなき男來て
威張りて歸りぬ
かなしくもあるか

はたらけど
はたらけど猶わが生活樂にならざり
ちつと手を見る

何もかも行末の事みゆるごとき
このかなしみは
拭ひあへずも

とある日に
酒をのみたくてならぬごとく
今日われ切に金を欲りせり

水晶の玉をよろこびもてあそぶ
わがこの心
何の心ぞ

事もなく
且つころよく肥えてゆく
わがこのごろの物足らぬかな

大いなる水晶の玉を
ひとつ欲し
それにむかひて物を思はむ

うぬ惚るる友に
合あ植うちてぬ
施せ興きをするごとき心こころに

ある朝あさのかなしき夢ゆめのさめぎはに
鼻はなに入り来きし
味あじ噌そうを煮にる香かよ

こつこつと空地あかぢに石いしをさざむ音ね
耳みみにつき来きぬ
家いえに入るまで

何なにがなしに
頭あたまのなかに崖がけありて
日ひ毎ごとに土つちのくづるごとし

遠方に電話の鈴の鳴るごとく
今日も耳鳴る
かなしき日かな

垢じみし裕の襟よ
かなしくも
ふるさとの胡桃焼くるにほひす

死にたくてならぬ時あり
はばかりに人目を避けて
怖き顔する

一隊の兵を見送りて
かなしかり
何を彼等のうれひ無げなる

邦人の顔たへがたく卑しげに
目にうつる日なり
家にこもらむ

この次の休日いぢに一日いちにち寝てみむと
思ひすごしぬ
三年このかた

或る時のわれのころを
焼きたての
麵麩めんぼに似たりと思ひけるかな

たんならたらたんならたらと
雨あめ霽はらが
痛いたむあたまにひびくかなしさ

ある日のこと
室の障子をほりかへぬ
その日はそれにて心なごみさ

かうしては居られずと思ひ
立ちにしが
戸外に馬の嘶きしまて

氣ぬけして廊下に立ちぬ
あららかに扉を推せしに
すぐ開きしかば

ちつとして
黒はた赤のインク吸ひ
堅くかわける海綿を見る

誰が見ても
われをなつかしくなるごとき
長さ手紙を書きたき夕

うすみどり
飲めば身體が水のごと透きとほるてふ
薬はなきか

いつも睨むランプに飽きて
三日ばかり
蠟燭の火にしたしめるかな

人間のつかはぬ言葉
ひよつとして
われのみ知れるごとく思ふ日

あたらしき心もとめて
名も知らぬ
街など今日もさまよひて來ぬ

友がみなわれよりえらく見ゆる日よ
花を買ひ來て
妻としたしむ

何すれば
此處に我ありや
時にかく打驚きて室を眺むる

人ありて電車のなかに唾を吐く
それにも
心いたまむとしき

夜明けまであそびてくらす場所が欲し
家をおもへば
ころ冷たし

人みなが家を持つてふかなしみよ
墓に入るとく
かへりて眠る

何かひとつ不思議を示し
人みなのおどろくひまに
消えむと思ふ

人といふ人のころに
一人づつ囚人がゐて
うめくかなしさ

叱られて
わつと泣き出す子供心
その心にもなりてみたさかな

盗むてふことさへ悪しと思ひえぬ
心はかなし
かくれ家もなし

放たれし女のごときかなしみを
よわき男の
感ずる日なり

庭石に
はたと時計をなげうてる
昔のわれの怒りいとしも

顔あかめ怒りしことが
あくる日は
さほどにもなきをさびしがるかな

いらだてる心よ汝はかなしかり
いざいざ
すこし呻などせむ

女あり
わがいひつけに背かじと心を碎く
見ればかなしも

ふがひなき
わが日の本の女等を
秋雨の夜にのしりしかな

男をとことらまれ男をとこと交まじり
負ひけてをり
かるがゆゑにや秋あきが身みに沁しむ

わが抱いだく思し想さうはすべて
金かねなきに困いするごとし
秋あきの風かぜ吹ふく

くだらない小せう説せつを書かきてよろこべる
男をとこ憐あはれなり
初はつ秋あきの風かぜ

秋あきの風かぜ
今日けふよりは彼かのふやけたる男をとこに
口くちを利きかじと思おもふ

はても見えぬ
真直の街をあゆむごとき
こころを今日は持ちえたるかな

何事も思ふことなく

いそがしく
暮らせし一日を忘れじと思ふ

何事も金金とわらひ

すこし経て
またも俄かに不平つのもり來

誰そ我に

ピストルにても撃てよかし
伊藤のごとく死にて見せなむ

煙

やとばかり
桂かつら首しゆ相しやうに手てとられし夢ゆめみて覺さめぬ
秋あきの夜よの二に時じ

病びやうのごと
思し郷きやうのこころ湧わく日ひなり
目めにあをぞらの煙けむりかなしも

一

己おのが名なをほのかに呼よびて
涙なみだせし
十四じふしの春はるにかへる術まじなし

青空あそぞらに消きえゆく煙けむり
さびしくも消きえゆく煙けむり
われにし似にるか

かの旅たびの汽車きしやの車掌しやうが
ゆくりなくも
我が中ちゆう學がくの友ともなりしかな

ほとばしる唧せき筒づつの水みづの
心地こころよさよ
しばしは若わかきころもて見みる

師も友も知らず責めにき
謎に似る
わが學業のおこたりの因

教室の窓より遁げて
ただ一人
かの城址に寝に行きしかな

不來方のお城の草に寝ころびて
空に吸はれし
十五の心

かなしみといはばいふべき
物の味
我の嘗めしはあまりに早かり

晴れし空仰げばいつも
口笛を吹きたくなりて
吹きてあそびき

夜寝ても口笛吹きぬ

口笛は
十五の我の歌にしありけり

よく叱る師ありき
髯の似たるより山羊と名づけて
口真似もしき

われと共に
小鳥に石を投げて遊ぶ
後備大尉の子もありしかな

城址の
石に腰掛け
禁制の木の実をひとり味ひしこと

その後、に我を捨てし友も
あの頃はともに書讀み
ともに遊び

學校の圖書庫の裏の秋の草
黄なる花咲きし
今も名知らず

花散れば
先づ人さきに白の服着て家出づる
我にてありしか

今は亡き姉の戀人のちとうとと
なかよくせしを
かなしと思ふ

夏休み果ててそのま
かへり來ぬ
若き英語の教師もありき

ストライキ思ひ出ても
今は早や我が血躍らず
ひそかに淋し

盛岡の中学校の
露臺の
欄干に最一度我を倚らしめ

神有りと言ひ張る友を
説きふせし
かの路傍の栗の樹の下

西風に
内丸大路の櫻の葉
かさこそ散るを踏みてあそびさ

そのかみの愛讀の書よ
大方は
今は流行らずなりにけるかな

石ひとつ
坂をくだるがごとくにも
我けふの日に到り着きたる

愁うれひある少年せうねんの眼めに羨うらやみさ
小鳥こどりの飛とぶを
飛とびてうたふを

解よ割わせし
蚯蚓かみづのいのちもかなしかり
かの校庭がうていの木柵もくさくの下もと

かぎりなき智識ちしきの欲よくに燃もゆる眼めを
姉あねは傷いたみさ
人戀ひとこふるかと

蘇峯そほうの書しよを我われに薦すすめし友とも早く
校がうを退しりぞきぬ
まづしさのため

あどけたる手つきをかしと
我のみはいつも笑ひき
博學の師を

自が才に身をあやまちし人のこと
かたりさかせし
師もありしかかな

そのかみの學校一のなまけ者
今は眞面目に
はたらきて居り

田舎めく旅の姿を
三日ばかり都に曝し
かへる友かな

茨^{ばら}鳥^{じま}の松^{まつ}の並^{なみ}木^きの街^か道^ぢを
わ^われと行^ゆきし少^{せう}女^{にょ}
才^{さい}をたのみき

眼^めを病^やみて黒^{くろ}き眼^め鏡^がを^がかけし頃^{ころ}
そ^その頃^{ころ}よ
一^{ひと}人^り泣^なくを^をおぼえし

わ^わがこころ
け^けふもひそかに泣^なかむとす
友^{とも}みな己^{おの}が道^{みち}をあゆめり

先^まんじて戀^{こひ}のあまさと
か^かなしさを^を知^しりし我^{われ}なり
先^まんじて老^おゆ

興きよう來きたれば
友ともなみだ垂たれ手てを揮ふりて
醉さか漢かんのごとくなりて語かたりき

人ひとごみの中なかをわけ來くる
わが友ともの
むかしながらの太たき杖つゑかな

見みよげなる年とし賀がの文ぶんを書かく人ひとと
あもひ過すぎにき
三み年としばかりは

夢ゆめさめてふつと悲かなしむ
わが眠ねむり
昔むかしのごとく安やすからぬかな

そのむかし秀才の名の高かりし
友牢にあり
秋のかぜ吹く

近眼にて
おどけし歌をよみ出でし
茂雄の戀もかなしかりしか

わが妻のむかしの願ひ
音楽のことにかかりき
今はうたはず

友はみな或日四方に散り行きぬ
その後八年
名擧げしもなし

わが戀を
はじめて友にうち明けし夜のことなど
思ひ出づる日

糸きれし紙鳶のごとくに
若き日の心かろくも
とびさりしかな

一一

ふるさとの訛なつかし
停車場の人ごみの中に
そを聴きにゆく

やまひある獸のごとき
わがこころ
ふるさとのこと聞けばあとなし

ふと思ふ
ふるさとにゐて日毎聴きし雀の鳴くを
三年聴かざり

亡くなれる師がその昔
たまひたる
地理の本など取りいてて見る

その昔
小学校の柱屋根に我が投げし鞠
いかにかなりけむ

ふるさとの
かの路傍のすて石よ
今年も草に埋もれしらむ

わかれをれば妹いとしも
赤き緒の
下駄など欲しとわめく子なりし

二日前に山の繪見しが
今朝になりて
にはかに戀しふるさとの山

飴賣のチャルメラ聴けば
うしなひし
をさなき心ひろへるごとし

このごろは
母も時時ふるさとのことを言ひ出づ
秋に入れるなり

それとなく
郷里のことなど語り出でて
秋の夜に焼く餅のほひかな

かにかくに澁民村は戀しかり
あもひての山
あもひての川

田も畑も賣りて酒のみ
ほろびゆくふるさと人に
心寄する日

あはれかの我の教へし
子等もまた
やがてふるさとを棄てて出づるらむ

ふるさとを出て來し子等の
相會ひて
よろこぶにまざるかなしみはなし

石をもて追はるごとく
ふるさとを出てしかなしみ
消ゆる時なし

やはらかに柳あをめる
北上の岸邊目に見ゆ
泣けとごとくに

ふるさとの
村醫の妻のつつましき櫛巻なども
なつかしきかな

かの村の登記所に來て
肺病みて
間もなく死にし男もありき

小學の首席を我と争ひし
友のいとなむ
木賃宿かな

千代治等も長じて戀し
子を擧げぬ
わが旅にしてなせしごとくに

ある年の盆の祭に
衣貸さむ踊れと言ひし
女を思ふ

うすのろの兄と
不具の父もてる三太はかなし
夜も書讀む

我と共に
栗毛の仔馬走らせし
母の無き子の盗癖かな

天形の被布の模様
今も目に見ゆ
六歳の日の戀

その名さへ忘られし頃
飄然とふるさとに來て
咳せし男

意地悪の大工の子などもかなしかり
戦に出てしが
生きてかへらず

肺を病む
極道地主の總領の
よめとりの日の春の雷かな

宗次郎に
おかねが泣きて口説き居り
大根の花白きゆふぐれ

小心の役場の書記の
氣の狂れし噂に立てる
ふるさとの秋

わが従兄
野山の獵に飽きし後
酒のみ家賣り病みて死にしかな

我ゆきて手をとれば
泣きてしづまりき
酔ひて荒れしそのかみの友

酒のめば
刀をぬきて妻を逐ふ教師もありき
村を逐はれき

年ごとに肺病やみの殖えてゆく
村に迎へし
若き醫者かな

ほたる狩
川にゆかむといふ我を
山路にさそふ人にてありき

馬鈴薯のうす紫の花に降る
雨を思へり
都の雨に

あはれ我がノスタルジヤは
金のこど
心に照れり清くしみらに

Nostalgia

Nostalgia

友として遊ぶものなき
性悪の巡査の子等も
あはれなりけり

閑古鳥

鳴く日となれば起るてふ
友のやまひのいかになりけむ

わが思ふこと
おほかたは正しかり
ふるさとのたより着ける朝は

今日聞けば
かの幸うすきやもめ人
きたなき戀に身を入るるてふ

わがために
なやめる魂をしづめよと
讃美歌うたふ人ありしかな

あはれかの男のごときたましひよ
今は何處に
何を思ふや

わが庭の白き躑躅を
薄月の夜に
折りゆきしことな忘れそ

わが村に
初めてイエスキリストの道を説きたる
若き女かな

霧ふかき好摩の原の
停車場の
朝の蟲こそすずろなりけれ

汽車の窓

はるかに北にふるさとの山見え來れば
襟を正すも

ふるさとの土をわが踏めば
何がなしに足軽くなり
心重れり

ふるさとに入りて先づ心傷むかな
道廣くなり
橋もあたらし

見もしらぬ女教師が
そのかみの
わが學舎の窓に立てるかな

かの家のかの窓にこそ
春の夜を
秀子とともに蛙聽きけれ

そのかみの神童の名の
かなしさよ
ふるさとに來て泣くはそのこと

ふるさとの停車場路の
川ばたの
胡桃の下に小石拾へり

ふるさとの山に向ひて
言ふことなし
ふるさとの山はありがたきかな

秋風のころよさに

舟風のうらみよさる

ふるさとの空遠みかも
高き屋にひとりぼりて
愁ひて下る

皎として玉をあざむく少人も
秋來といふに
物を思へり

かなしきは
秋風ぞかし
稀にのみ湧きし涙の繁に流るる

青に透く
かなしみの玉に枕して
松のひびきを夜もすがら聴く

神寂びし七山の杉
火のごとく染めて日入りぬ
静かなるかな

そを讀めば
愁ひ知るといふ書焚ける
いにしへ人の心よるしも

ものなべてうらはかなげに
暮れゆきぬ
とりあつめたる悲しみの日は

水潦
暮れゆく空とくれなるの紐を浮べぬ
秋雨の後

秋立つは水にかも似る
洗はれて
思ひことごと新しくなる

愁ひ来て
丘のぼれば
名も知らぬ鳥啄めり赤き茨の實

秋の辻
四すぢの路の三すぢへと吹きゆく風の
あと見えすかも

秋の聲まづいち早く耳に入る
かかる性持つ
かなしむべかり

目になれし山にはあれど
秋來れば
神や住まむとかしこみて見る

わが爲さむこと世に盡きて
長き目を
かくしもあはれ物を思ふか

さらさらと雨落ち來り
庭の面の濡れゆくを見て
涙わすれぬ

ふるさとの寺の御廊に
踏みける
小櫛の蝶を夢にみしかな

こころみに
いとけなき日の我となり
物言ひてみむ人あれと思ふ

はたはたと黍の葉鳴れる
ふるさとの軒端なつかし
秋風吹けば

摩れあへる肩のひまより
はつかにも見さといふさへ
日記に残れり

風流男は今も昔も
泡雪の
玉手さし捲く夜にし老ゆらし

かりそめに忘れても見まし
石だたみ
春生ふる草に埋るるがごと

その昔搖籃に寝て
あまたたび夢にみし人か
切になつかし

神無月
岩手の山の
初雪の眉にせましり朝を思ひぬ

ひてり雨さらさら落ちて
前栽の
萩のすこしく亂れたるかな

秋の空廓寥として影もなし
あまりにさびし
鳥など飛べ

雨後の月
ほどよく濡れし屋根瓦の
そのところどころ光るかなしさ

われ饑ゑてある日に
細き尾を掉りて
饑ゑて我を見る犬の面よし

いつしかに
泣くといふこと忘れたる
我泣かしむる人のあらじか

茫然として
ああ酒のかなしみぞ我に來れる
立ちて舞ひなむ

蟬鳴く
そのかたはらの石に踞し
泣き笑ひしてひとり物言ふ

力なく病みし頃より
口すこし開きて眠るが
癖となりなき

人ひとり得るに過ぎざる事をもて
大願とせし
若きあやまち

物怨ずる
そのやはらかき上目をば
愛づとことさらつれなくせむや

かくばかり熱き涙は
初戀の日にもありきと
泣く日またなし

長く長く忘れし友に
會ふごとき
よるこびをもて水の音聴く

秋の夜の
銅鐵の色の大空に
火を噴く山もあれなど思ふ

岩手山
秋はふもとの三方の
野に満つる蟲を何と聴くらむ

父のごと秋はいかめし
母のごと秋はなつかし
家持たぬ兒に

秋來れば
戀ふる心のいとまなさよ
夜もい寝がてに雁多く聴く

長月も半ばになりぬ
いつまでか
かくも幼く打出でずあらむ

思ふてふこと言はぬ人の
おくり來し
忘れな草もいちじろかりし

秋の雨に逆反りやすき弓のごと
このごろ
君のしたしまぬかな

松の風夜晝ひびきぬ
人訪はぬ山の祠の
石馬の耳に

ほのかなる朽木の香り
そがなかの葦の香りに
秋やや深し

時雨降るとき音して
木傳ひぬ
人によく似し森の猿ども

森の奥
遠きひびきす
木のうろに白ひく侏儒の國にかも來し

世のはじめ
まづ森ありて
半神の人そが中に火や守りけむ

はてもなく砂うちつづく
戈壁の野に住みたまふ神は
秋の神かも

あめつちに
わが悲しみと月光と
あまねき秋の夜となれりけり

うらがなしき
夜の物の音洩れ来るを
拾ふがごとくさまよひ行きぬ

旅の子の
ふるさとに
来て眠るが
に
げに静かにも
冬の来しかな

旅の子の
ふるさとに
来て眠るが
に
げに静かにも
冬の来しかな

忘れがたき人人

たのみつる年の若さを數へみて
指を見つめて
旅がいやになりき

三度ほど
汽車の窓よりながめたる町の名なども
したしかりけり

國館の床屋の弟子を
おもひ出てぬ
耳剃らせるがころよかりし

わがあとを追ひ來て
知れる人もなき
邊土に住みし母と妻かな

今もわらめとらず
おそらひし友よ
おそらくは生涯妻をむかへじと

話を橋の欄干に糞塗りし
も友はかなじみてしき

友の手に紙のおどけ悲しも
傷心の句を誦してゐし
目を閉ぢて

津輕の海を思へば
いもうとの眼見ゆ
船に酔ひてやさしくなれる

あはれかの
眼鏡の縁をさびしげに光らせてるし
女教師よ

友われに飯を與へき
その友に背さし我の
性のかなしさ

函館の青柳町こそかなしけれ
友の戀歌
矢ぐるまの花

ふるさとの
麦のかをりを懐かしむ
女の眉にこころひかれき

あたらしき洋書の紙の
香をかぎて
一途に金を欲しと思ひしが

しらなみの寄せて騒げる
函館の大森濱に
思ひしことども

朝な朝な
支那の俗歌をうたひ出づる
まくら時計を愛でしかなしみ

漂泊の愁ひを叙して成らざりし
草稿の字の
読みがたさかな

いくたびか死なむとしては
死なざりし
わが來しかたのをかしく悲し

函館の臥牛の山の半腹の
碑の漢詩も
なにかば忘れぬ

むやむやと
口の中にてたふとげの事を
乞食もありき

とるに足らぬ男と思へと言ふごとく
山に入りなき
神のごとき友

卷煙草口にくはへて
浪あらし
磯の夜霧に立ちし女よ

演習のひまにわざわざ
汽車に乗りて
訪ひ來し友とのめる酒かな

大川の水の面を見るごとに
郁雨よ
君のなやみを思ふ

智慧とその深き慈悲とを
もちあぐみ
爲すこともなく友は遊べり

こころざし得ぬ人人の
あつまりて酒のむ場所が
我が家なりしかな

かなしめば高く笑ひき
酒をもて
悶を解すといふ年上の友

若くして
数人の父となりし友
子なきがごとく酔へばうたひき

さりげなき高き笑ひが
酒とともに
我が腹に沁みにけらしな

夜汽車の窓に別れたる
別れが今は物足らぬかな

雨に濡れし夜汽車の窓に
映りたる山間の町のともしびの色

雨つよく降る夜の汽車の
たえまなく零流るる
窓硝子かな

真夜中の
俱知安驛に下りゆきし
女の髪の古き痕あと

札幌の幌に
かの秋われの持てゆきし
しかして今も持てるかなしみ

アカシヤの街樹にポプラに
秋の風がかなしと日記に残れり
吹くがかなしと日記に残れり

しんとして幅廣き街の
秋の夜の焼くるにほひよ
玉蜀黍の焼くるにほひよ

わが宿の姉と妹のいさかひに
初夜過ぎゆきし
札幌の幌の雨

石狩の美國といへる停車場の
柵に乾してありし
赤き布片かな

かなしきは小樽の町よ
歌ふことなき人人の
聲の荒さよ

泣くがごと首ふるはせて
手の相を見せよといひし
易者もありき

いささかの錢借りてゆきし
わが友の
後姿の肩の雪かな

世わたりの拙きことを
ひそかにも
誇りとしたる我にやはあらぬ

汝が瘦せしからだはすべて
謀叛氣のかたまりなりと
いはれてしこと

かの年のかの新聞の
初雪の記事を書きしは
我なりしかな

椅子をもて我を撃たむと身構へし
かの友の酔ひも
今は醒めつらむ

負けたるも我にてありき
あらそひの因も我なりしと
今は思へり

毆らむといふに
毆れとつめよせし
昔の我のいとほしきかな

汝三度
この咽喉に劍を擬したりと
彼告別の辭に言へりけり

あらそひて
いたく憎みて別れたる
友をなつかしく思ふ日も來ぬ

あはれかの眉の秀てし少年よ
弟と呼べば
はつかに笑みしが

わが妻に着物縫はせし友ありし
冬早く来る
植民地かな

平手もて
吹雪にぬれし顔を拭く
友共産を主義とせりけり

酒のめば鬼のごとくに青かりし
大いなる顔よ
かなしき顔よ

樺太に入りて
新しき宗教を創めむといふ
友なりしかな

治まれる世の事無さに
飽きたりといひし頃こそ
かなしかりけれ

共同の薬屋開き
儲けむといふ友なりき
詐欺せしといふ

あをじろき頬に涙を光らせて
死をば語りき
若き商人

子を^こ負^おひて
雪^{ゆき}の吹^ふき入^いる停^ひ車^{しや}場^ばに
わ^れ見^み送^{おく}りし妻^{つま}の眉^{まゆ}か^な

敵^{てき}と^して憎^{にく}みし友^{とも}と
や^や長^{なが}く手^てを^をば握^{にぎ}り^き
わ^かれ^れと^いふ^に

ゆ^るぎ^い出^いづ^る汽^き車^{しや}の窓^{まど}よ^り
人^{ひと}先^まに顔^{かほ}を^を引^ひき^しも
負^まけ^ざら^むた^め

み^どれ^れ降^ふる
石^{いし}狩^{かり}の野^のの汽^き車^{しや}に^に讀^よみ^し
ツ^ルゲ^エネ^フの物^{もの}語^ごか^な

わが去れる後の噂を
おもひやる旅出はかなし
死ににゆくごと

わかれ来てふと瞬けば
ゆくりなく
つめたきものの頬をつたへり

忘れ來し煙草を思ふ
ゆけどゆけど
山なほ遠き雪の野の汽車

うす紅く雪に流れて
入り日影
曠野の汽車の窓を照せり

腹すこし痛み出でしを
しのびつつ
長路の汽車にのむ煙草かな

乗合の砲兵士官の
劍の鞘
がちやりと鳴るに思ひやぶれき

名のみ知りて縁もゆかりもなき土地の
宿屋安けし
我が家のごと

伴なりしかの代議士
口あける青き寐顔を
かなしと思ひき

今夜こそ思ふ存分泣いてみむと
泊りし宿屋の
茶のぬるさかな

水蒸気
列車の窓に花のごと凍てしを染むる
あかつきの色

ごちと鳴る風のあと
乾きたる雪舞ひ立ちて
林を包めり

空知川雪に埋れて
鳥も見えず
岸邊の林に人ひとりゐき

寂寞を敵とし友とし
雪のなかに
長き一生を送る人もあり

いたく汽車に疲れて猶も
されぎれに思ふは
我のいとしさなりき

うたふごと驛の名呼びし
柔和なる
若き驛夫の眼をも忘れず

雪のなか
處處に屋根見えて
煙突の煙うすくも空にまよへり

遠くより
笛ながたとひびかせて
汽車今とある森林に入る

何事も思ふことなく
一日のひびきに心まかせぬ
汽車のひびきに心まかせぬ

さいはての驛に下り立ち
雪あかり
さびしさ町にあゆみ入りにき

しらしらと氷かがやき
千鳥なく
釧路の海の冬の月かな

こほりたるインクの罈を
火に翳し
涙ながれぬともしびの下

顔とこゑ
そののみ昔に變らざる友にも會ひき
國の果にて

あはれかの國のはてにて
酒のみき
かなしみの滓を喫るごとくに

酒のめば悲しみ一時に湧き來るを
寐て夢みぬを
うれしとはせし

出しぬけの女の笑ひ
身に沁みき
厨に酒の凍る真夜中

わが酔ひに心いためて
うたはざる女ありしが
いかなれるや

小奴といひし女の
やはらかき
耳朶なども忘れがたかり

よりそひて
深夜の雪の中に立つ
女の右手のあたかかさかな

死しにたくはないかと言いへば
これ見みよと
咽喉のどの痕きずを見みせし女をんなかな

藝げい事ごとも顔かほも
かれより優すぐれたる
女をんなあしざまに我われを言いへりとか

舞まへといへば立たちて舞まひにき
あのづから
悪あく酒しゅの酔よひにたふるるまでも

死しぬばかり我わが酔よふをまちて
いろいろの
かなしきことを囁ささきし人ひと

いかにせしと言へば
あをじろき酔ひざめの
面に強ひて笑みをつくりき

かなしきは
かの白玉のごとくなる腕に残せし
キスの痕かな

酔ひてわがうつむく時も
水ほしと眼ひらく時も
呼びし名なりけり

火をしたふ蟲のごとくに
ともしびの明るき家に
かよひ慣れにき

きしきしと寒さに踏めば板軋む
かへりの廊下の
不意のくちづけ

その膝に枕しつつも
我がころ
思ひしはみな我のとなり

さらさらと氷の屑が
波に鳴る
磯の月夜のゆきかへりかな

死にしとかこのごろ聞きぬ
戀がたき
才あまりある男なりしが

十年まへに作りしといふ漢詩を
酔へば唱へき
旅に老いし友

吸ふごととに
鼻がびたりと凍りつく
寒き空気を吸ひたくなりぬ

波もなき二月の灣に
白塗の
外國船が低く浮かべり

三味線の絃のきれしを
火事のごと騒ぐ子ありき
大雪の夜に

神のごと
遠く姿をあらはせる
阿寒の山の雪のあけぼの

郷里にゐて
身投げせしことありといふ
女の三味にうたへるゆふべ

葡萄色の
古き手帳にのこりたる
かの會合の時と處かな

よごれたる足袋穿く時の
氣味わるき思ひに似たる
思出もあり

頬の寒さ
流離の旅の人として
路問ふほどのこと言ひしのみ

さりげなく言ひし言葉は
さりげなく君も聴きつらむ
それだけのこと

ひややかに清き大理石に
春の日の静かに照るは
かかる思ひならむ

世の中の明るさのみを吸ふごとき
黒き瞳の
今も目にあり

かの時に言ひそびれたる
大切の言葉は今も
胸にのこれぞ

眞白なるラムプの笠の
瑕のごと
流離の記憶消しがたきかな

函館のかの焼跡を去りし夜の
こころ残り
今も残しつ

人がいふ
鬢のほつれのめでたさを
物書く時の君に見たりし

馬鈴薯の花咲く頃と
なれりけり
君もこの花を好きたまふらむ

山の子の
山を思ふがごとくにも
かなしき時は君を思へり

忘れをれば
ひよつとした事が思ひ出の種にまたなる
忘れかねつも

病むと聞き
癒えしと聞きて
四百里のこなたに我はうつつなかりし

君に似し姿を街に見る時の
こころ躍りを
あはれと思へ

かの聲を最一度聴かば
すつきりと
胸や霽れむと今朝も思へる

いそがしき生活のなかの
時折のこの物おもひ
誰のためぞも

しみじみと
物うち語る友もあれ
君のことなど語り出でなむ

死ぬまで一度會はむと
言ひやらば
君もかすかにうなづくらむか

時として
君を思へば
安かりし心にはかに騒ぐかなしさ

わかれ来て年を重ねて
年ごとに戀しくなれる
君にしあるかな

石狩の都の外
君が家の
林檎の花の散りてやあらむ

手
套
を
脱
ぐ
時

長き文
三年のうち
に三度來ぬ
我が書は
四度にか
あらむ

手袋を脱ぐ

手^て袋^{ぶくろ}を脱^ぬぐ手^てふと休^{やす}む
何^{なに}やらむ
こころかすめし思^{おも}ひ出^でのあり

い^いつしかに
情^{じやう}をい^いつはるこ^こと知^しりぬ
髪^{かみ}を立^たてしもその頃^{ころ}なりけむ

朝あさの湯ゆの
湯ゆ槽たがのふちにうなじ載のせ
ゆるく息いきする物もの思おもひかな

夏なつ來くれば
うがひ薬ぐすりの
病やまひある齒はに沁しむ朝あさのうれしかりけり

つくづくと手てをながめつつ
おもひ出いでぬ
キスが上手じやうずの女をんななりしが

さびしきは
色いろにしたしまぬ目のゆゑと
赤あかき花はななど買かはせけるかな

新しき本を買ひ来て讀む夜半の
そのたのしさも
長くわすれぬ

旅七日
かへり來ぬれば
わが窓の赤きインクの染みもなつかし

古文書のなかに見いてし
よごれたる
吸取紙をなつかしむかな

手にためし雪の融くるが
こちよく
わが寐飽きたる心には沁む

薄れゆく障子の日影
そを見つつ
こころいつしか暗くなりゆく

ひやひやと
夜は薬の香のほふ
醫者が住みたるあとの家かな

窓硝子
塵と雨とに曇りたる窓硝子にも
かなしみはあり

六年ほど毎日毎にかぶりたる
古き帽子も
棄てられぬかな

こころよく
春のねむりをむさぼれる
目にやはらかき庭の草かな

赤煉瓦遠くつづける高屏の
むらさきに見えて
春の目ながし

春の雪
銀座の裏の三階の煉瓦造りに
やはらかに降る

よごれたる煉瓦の壁に
降りて融け降りては融くる
春の雪かな

目を病める
若き女の倚りかかる
窓にしめやかに春の雨降る

あたらしき木のかをりなど
ただよへる
新開町の春の静けさ

春の街
見よげに書ける女名の
門札などを読みありくかな

そことなく
蜜柑の皮の焼くるごときにほひ残りて
夕となりぬ

にぎはしき若き女の集會の
こゑ聴き倦みて
さびしくなりたり

何處やらに
若き女の死ぬるとき惱ましきあり
春の雲降る

コニヤツクの酔ひのあとなる
やはらかき
このかなしみのすずろなるかな

白き皿
拭きては棚に重ねる
酒場の隅のかなしき女

乾^{かわ}きたる冬の大路^{おほぢ}の
何^{なに}處^{ところ}やらむ
石^{いし}炭^{たん}酸^{さん}のほひひそめり

赤^{あか}赤^{あか}と入^い日^ひうつれる
河^かばたの酒^{さか}場^ばの窓^{まど}の
白^{しろ}き顔^{かほ}かな

新^{あたら}しきサラダの皿^{さら}の
酢^すのかをり
こころに沁^しみてかなしき夕^{ゆふ}

空^{そら}色の罐^{びん}より
山^{やま}羊^{がら}の乳^{ちち}をつぐ
手^てのふるひなどいとしかりけり

すがた見の
息のくもりに消されたる
酔ひのうるみの眸のかなしさ

ひとしきり静かになれる
ゆふぐれの
厨のこるハムのはひかな

ひややかに饅のならべる棚の前
齒せせる女を
かなしとも見き

やや長きキスを交して別れ來し
深夜の街の
遠き火事かな

病院の窓のゆふべの
ほの白き顔にありたる
淡き見覚え

何時なりしか
かの大川の遊船に
舞ひし女をおもひ出にけり

用もなき文など長く書さして
ふと人こひし
街に出てゆく

しめらへる煙草を吸へば
おほよその
わが思ふことも軽くしめれり

す
るどくも
夏の來るを感じつつ
雨後の小庭の土の香を嗅ぐ

す
ずしげに飾り立てたる
硝子屋の前にながめし
夏の夜の月

君來るといふに夙く起き
白シャツの
袖のよごれを氣にする日かな

おちつかぬ我が弟の
このごろの
眼のうるみなどかなしかりけり

どこやらに杭打つ音し
大桶をころがす音し
雪ふりいでぬ

人氣なき夜の事務室に
けたたましく
電話の鈴の鳴りて止みたり

目さまして
ややありて耳に入り来る
真夜中すぎの話聲かな

見てをれば時計とまれり
吸はるるごと
心はまたもさびしさに行く

朝朝の
うがひの料の水薬の
罫がつめたき秋となりけり

夷かに麥の青める
丘の根の
小徑に赤き小櫛ひろへり

裏山の杉生のなかに
斑なる日影這ひ入る
秋のひるすぎ

港町
とろると鳴きて輪を描く鳶を壓せる
潮ぐもりかな

小春日の曇硝子にうつりたる
鳥影を見ても
すずろに思ふ

ひとならび泳げるとき
家の高低の軒に
冬の日の舞ふ

京橋の瀧山町の
新聞社
灯ともる頃のいそがしさかな

よく怒る人にてありしわが父の
日ごろ怒らず
怒れと思ふ

あさ風が電車のなかに吹き入れし
柳のひと葉
手にとりて見る

ゆゑもなく海が見たくて
海に来ぬ
こころ傷みてたへがたき日に

たひらなる海につかれて
そむけたる
目をかきみだす赤き帯かな

今日逢ひし町の女の
どれもこれも
戀にやぶれて歸るとき日

汽車の旅
とある野中の停車場の
夏草の香のなつかしかりき

朝まだき
やつと間に合ひし初秋の旅出の汽車の
堅き麩麩かな

かの旅の夜汽車の窓に
おもひたる
我がゆくすゑのかなしかりしかな

ふと見れば
とある林の停車場の時計とまれり
雨の夜の汽車

わか
かれ
来て
燈火
小暗
き夜
の汽
車
の窓
に弄
ぶ
宵
き林
檜
よ

い
つ
も
來
る
こ
の酒
肆
の
か
な
し
さ
よ
ゆ
ふ
日
赤
赤
と酒
に射
し入
る

白
き蓮
沼
に咲
くご
とく
か
な
し
み
が
酔
ひの
あ
ひ
だ
に
は
つ
き
り
と浮
く

壁
ご
し
に
若
き女
の泣
くを
さ
く
旅
の宿
屋
の秋
の蚊
帳
か
な

取りいでし去年の裕の
なつかしきにほひ身に沁む
初秋の朝

氣にしたる左の膝の痛みなど

いつか癒りて

秋の風吹く

賣り賣りて
手垢きたなきドイツ語の辭書のみ残る
夏の末かな

ゆるもなく憎みし友と

いつしかに親しくなりて

秋の暮れゆく

赤紙の表紙手擦れし
國禁の行李の底にさがす日
書を行

賣ること差し止められし
本の著者に
路にて會へる秋の朝かな

今日よりは
我も酒など呷らむと思へる日より
秋の風吹く

大海の
その片隅につらなれる島島の上
秋の風吹く

うるみたる目と
目の下の黒子のみ
いつも目につく友の妻かな

いつ見ても
毛糸の玉をころがして
襪を編む女なりしが

葡萄色の
長椅子の上に眠りたる猫ほの白き
秋のゆふぐれ

ほそぼそと
其處ら此處らに蟲の鳴く
晝の野に来て讀む手紙かな

夜おそく戸を繰りをれば
白きもの庭を走れり
犬にやあらむ

夜の二時の窓の硝子を
うす紅く
染めて音なき火事の色かな

あはれなる戀かなと
ひとり呟きて
夜半の火桶に炭添へにけり

眞白なるラムプの笠に
手をあてて
寒き夜にする物思ひかな

水のごと
身體をひたすかなしみに
葱の香などのまじれる夕

時ありて
猫のまねなどして笑ふ
三十路の友のひとり住みかな

氣弱なる斥候のごとく
おそれつつ
深夜の街を一人散歩す

皮膚がみな耳にてありき
しんとして眠れる街の
重き靴音

夜もそく停車場に入り
立ち坐り
やがて出てゆきぬ帽なき男

氣がつけば
しつとりと夜霧下りて居り
ながくも街をさまよへるかな

若しあらば煙草恵めと
寄りて来る
あとなし人と深夜に語る

曠野より歸るごとくに
歸り來ぬ
東京の夜をひとりあゆみて

銀行の窓の下なる
舗石の霜にこぼれし
青イソクかな

ちよんちよんと
とある小藪に頬白の遊ぶを眺む
雪の野の路

十月の朝の空気に
あたらしく
息吸ひそめし赤坊のあり

十月の産病院の
しめりたる
長き廊下のゆきかへりかな

ひらさきの袖垂れて
空を見上げゐる支那人ありき
公園の午後

孩兒の手ざはりのごとき
思ひあり
公園に来てひとり歩めば

ひさしぶりに公園に来て
友に會ひ
堅く手握り口疾に語る

公園の木の間に
小鳥あそべるを
ながめてしばし憩ひけるかな

晴れし日の公園に来て
あゆみつつ
わがこのごろの衰へを知る

思い出のかのキスかとも

ちどろきぬ

プラタスの葉の散りて觸れしを

公園の隅のベンチに
二度ばかり見かけし男
このごろ見えす

公園のかなしみよ
君の嫁ぎてより
すでに七月來しこともなし

pub. atea.

公園のとある木蔭の捨椅子に
思ひあまりて
身をば寄せたる

忘れぬ顔なりしかな

今日街に
捕吏にひかれて笑める男は

マチ擦れば
二尺ばかりの明るさの中
をよぎれる白き蛾のあり

目をとちて
口笛かすかに吹きてみぬ
寐られぬ夜の窓にもたれて

わが友は
今日も母なき子を
負ひて
かの城址にさまよへるかな

夜おそく
つとめ先よりかへり来て
今死にしてふ兒を抱けるかな

二三ころ
いまはのきはに
微かにも泣きしといふに
なみだ誘はる

眞白なる大根の根の肥ゆる頃
うまれて
やがて死にし兒のあり

あそ秋あきの空そら氣きを
三尺四方さんじやくしほうばかり
吸すひてわが兒この死しにゆきしかな

死しにし兒この
胸むねに注射しゆしやうの針はりを刺さす
醫者いしやの手てもとにあつまる心こころ

底そこ知しれぬ謎なぞに對むかひてあるごとし
死し兒このひたひに
またも手てをやる

かなしみの強つよくいたらぬ
さびしさよ
わが兒このからだ冷ひやえてゆけども

かなしくも
 夜明くるまでは残りぬ
 息きれし兒の肌のぬくもり

— (をばり) —

明治四十三年十一月廿八日印刷
 明治四十三年十二月一日發行

著者 石川 啄木

發行者 西村 寅次郎

印刷者 横田 五十吉

印刷所 横田 活版所

發行所

東京市京橋區南傳馬町三丁目十番地
 東雲堂書店
 電本一六三九番 振替五六一四番

定價六拾錢

文學博士上田敏氏序詩
與謝野寬氏跋

あこがれ
石川啄木著

詩七十六篇を收む。

明治三十八年五月

三日東京京橋小田

島書房發行。四六

版二百八十六頁。

定價金五十錢。

絶版

岩野泡鳴著
中澤弘光兩氏畫
名取春川
小説
浪
(新刊)

菊判和布美裝釘函入
定價金壹圓二十錢
送費金十二錢

岩野泡鳴著
中澤弘光兩氏畫
名取春川
小説
浪
(近刊)

菊判クロオス裝函入
定價金壹圓二十錢
送費金十二錢

著者昨冬樺太より北海道の天地を放浪するや、
歸來忽ちその全力を傾倒してこの長篇あり。本
書は若々しき北海特殊の天然、風俗、並に事業
界を背景として、新思想を有する一放浪者の事
業、實生活、人生觀、日本中心の政治文明論、
文藝論等を具體的に叙述するもの也、自然主義
は必ずしも平凡なる客觀描寫に止まらず、著者
が夙に唱導せし刹那主義の深刻と痛切無かるべ
からず、この書の如きは青年に讀まざるべきもの
なるのみならず、中年もしくは中年以上の讀者
に對しても決して空疎を感じせしめざるものなり

(續篇十一月申發賣)

中村星湖著 (再版)
高村光太郎畫

小説 星湖集

四六判佛蘭西流假綴
定價金 六拾錢
送費金 六錢

本書は近來斷然として頭角を現はし來れる著者の、尤も自信あつき集なり。本書に收めたるものは皆當時の論壇を騒がせ、著者の未來の計りがたきを思はせたるもの。
「作爲が藝術であつて、批判觀照が藝術でないとするれば、この集は最も非藝術的なものである。而して自分の性はそれに甘んずることを恥ぢない。」
と、著者はその序に記せり。

田山花袋選
木下 茂畫

小説 二十一篇

四六判木版印刷表紙
定價金 五拾五錢
送費金 六錢

皆越橋上松水加穂川尾秦田
川知行本田胡仙山藤野山
水菱良胡仙山藤野山
草一果子雨浪水波徑歌
人八

田山先生序

「二十一篇」が世に出ることになつた。これらの作は私が四年間に若い人々の無数の作品の中から特に選んだものである。その中には田舎のさびしい町一室で、木嵐の吹き荒れるのを聞きながら筆を執つた人もあれば、雪の降り頻る山國の寒村に落ちた都会に於いて作られたものもあつた。(中略) 私はそれ等の多くの作品に接する度に、藝術の常に難かしいことを思はずには居られなかつた。(中略) 諸君はこの難かしい藝術に赴く(中略) 世に薦め得たことを誇りとす。

若山牧水著 (再版)
石井柏亭畫

歌集 別離

菊半裁クロス天金椽
定價金 七拾五錢
送費金 六錢

わが明治歌壇に自然主義的革命をなしたる著者の既往の歌一千首を收む。「別離」は青年の悲しみの結晶なり、喜びの結晶なり、戀きの結晶なり、嘆きの結晶なり。著者の痛切なる天地人生の悲しみ、醒めたる自意識の絶叫、恐ろしき消極の絶望、涙を包める殘忍の姿は、強烈なる色彩と、また淡き戀の零亂氣に包まれて、錯綜したる姿を以て一卷に現はる。

前田夕暮著 (再版)
長原止水畫

歌集 收穫

四六判タロス美装釘
定價金 六拾錢
送費金 六錢

△一批評家は曰く「收穫」一巻六百首、收むるところのものは、著者が人生の行路を旅してゆくその足跡の一步一步だ、一首の歌はやがて著者の人生旅行のワン、ステップだ。」
△一批評家は曰く「女性より見たる男性を歌つたものとして、與謝野夫人の如きもの、他にないのは言ふまでもない。男性より見たる女性を歌つたものとして、夕暮氏の作のごときも他にはないと私には思へた。」
この意味に於て私は「收穫」を尊重する。
(久しく品切のところ收穫以後の新作數十首を加へ、時價を新たにして再版を發行せり。)

川路柳虹著 (新刊)
同 氏裝幀

詩口語
路傍の花

四六判佛蘭西式假綴
定價金五拾錢
送費金六錢

新しい水は新しい瓶に盛られなければならぬ。口語詩の運動は決して物ずきな戯れごとではなかつた。それは内在的要求がこの詩形の自由を擇んだので、この自由な口語詩の一句一句は作者の感情の一呼吸一呼吸である。著者は夙くからこの自覺の上に立つて創作を續けて來た人で、本書はその作七章、七十一篇の長短詩を收めたものである。新しい詩歌を知らんとする人にこの傷み多き著者の詩集を呈する。

河井醉茗著 (新刊)
長原止水畫

散文
霧

四六判ラフ印刷美本
定價金五拾五錢
送費金六錢

△河井醉茗氏の「霧」は散文詩集としては詩壇の第一聲をなしたるものである。是は一種新形式の試みとして色んな方面から考へて見る必要があると思ふ。
△氏の散文詩は他の模倣を許さない特色を持つてゐる。深い、強い色はないが、淺いみどりのやうな感じを持つたものだ。
△私の殊に傑出してゐると思つたのは、「旗」に「霧」に「雪」に「信濃町の月夜」表まで來た人など叙景や諷刺や哀感がそれ／＼巧みに出てゐる。
△事實事件、事物のある一點の興味と矛盾とを發見することに於て、醉茗氏の散文詩には確に特色がある。
△醉茗氏の散文詩には確かに未來がある。「霧」はたゞ一步に過ぎない。私は其の未來に多くの期待を持つてゐる。
(藤部嘉音氏「讀賣新聞」)

北原白秋著 (新刊)
同 氏裝幀

詩集
思ひ出

菊半裁カルタ模様表紙
定價金八拾五錢
送費金六錢

思ひ出 五十九篇
過ぎし日 十八篇
詩 一九一〇年哀調 七篇
柳河時花歌 十五篇
斷章 五十六篇
歌 新聲二百二十四章
繪 著者自畫像外二葉

クロポトキン著 (近刊)
佐藤綠葉譯

露西亞文學

菊判全壹冊
定價未定

現代の吾が文壇に最も多くの影響を及ぼし、新興文學の嚮ふ處を知らしめたものは露西亞文學である。殊にツルゲネフ、トルストイ、ゴーリキー、チエホフの文學である。クロポトキンの「露西亞文學」は、之ら近代藝術界の巨匠を生むに至つた露國思想界の徑路を叙するに、忠實精到の筆を以てし、極めて同情ある批評と劃切なる解剖とを加へてゐる。殊にこのクロポトキンの「露西亞文學」はこの種の露西亞文學史の中にあつて世界の文壇にオーソリテイをなしてゐる。故に本書を讀めば、露西亞語の起源より、古代民俗文學、民話等の興起、プーシキン、レルモンツフ、ゴーリキー等の文學を経て、最近文壇の現狀に至るまで、一目のもとに知る事が出来る。

遂にわれらの世に新らしき詩歌の時は來れり。われらの生に新らしき詩歌の喜びは來れり。詩歌なくして生き得ざる人々にわれらの此努力を捧ぐ。(編輯者)

發行所 東雲堂書店
東南電振 京傳本替 京馬一五 市町六六 京三三一 橋丁九四 區目番番

純文藝 雜誌 創作

每月一回一日發行
一冊定價貳拾錢郵稅壹錢五厘
三冊六拾錢六冊壹圓廿錢(稅共)

■思想界無冠の帝王ト翁研究の第一書■

露國クロポトキン著

トルストイの思想と文學

四六判三百頁
新裝美本
定價金六拾錢
送費金六錢

附錄 トルス
研究ト
内田魯庵先生
徳富蘆花先生
島崎藤村先生
島村抱月先生
馬場孤蝶先生
昇曙夢先生
佐藤綠葉譯及編

クロポトキンの著書は日本に於てそのすべての翻譯流布を禁ぜられつつある今日、些の危険なくして讀まざるは氏の心血を傾倒して完成したる「露西亞文學史」也。露西亞文學史」の中最も忠實精倒なる批評と解剖とを加へたるは、實に「トルストイの思想と文學」を叙述したる一項なりとす。ト翁逝きて旬日、偉人の偉人傳と、日本名家の見たるト伯研究とを添へたるこの一大名著出づ、謹んで日本思想界一般社會及びト翁研究者に薦むるもの也。

(四十四年一月發行)

■偉人の偉人傳・日本名家のト翁批評■

伯爵大隈重信先生序

四六判三百五十頁
定價金七拾錢送費八錢

現代青年に與ふ

現代教育叢書第一編

儒教復興し、先哲の遺訓哲學書などは盛んに翻刻研究され、また一方には社會主義虛無主義など黨を組みめて人心を恟々たらしめ、文壇の先輩は、自然主義を説き、一方生存競争の激しき結果は忌むべき拜金主義、實利主義などの風潮青年の眼を幻惑し、紛々として青年にその適從するところを知らしめず、日本の四十四年はこれら喧囂の中にその新春に入らんとす。わが社茲に見るところあり、現代教育叢書の第一編として、現今思想界、宗教界、文界、學者界その他の階級より青年に與ふべき教訓、主張、方針、主義などを聞きて一書を成す。これを新春第一の弊堂の學業として讀んで現代青年に呈す。

(四十四年一月十五日發行)

